

## 自衛艦隊司令官講話等シリーズ（その1）

我々の職務は艦艇創成である。が、我々が創成する艦艇は用兵者の手によって初めてその力を発揮する。その用兵者の胸の内、頭の中を、現自衛艦隊司令官の講話を通じて覗き、理解し、「より良い艦艇創り」の方向を模索することは極めて重要なことと考える。したがって過去にも何度か興味深い点のみを引用したが、以下は、隷下部隊等に対し示された方針、指針をシリーズで紹介することとする。

## 【着任訓示】（15. 3. 27）

海将 牧本信近、本日から自衛艦隊の指揮を執る。前司令官の定めた諸令達規則及び承認した事項は、当面そのままとする。

国際情勢の緊迫度が一層増すとき、本日ここに、諸官の出迎えを受け、儀仗隊の威容に接し、自衛艦隊の即応状態を見て、本職、あらためて身の引き締まる思いを禁じえない。即ち、「海上自衛隊の精鋭を集めた自衛艦隊としてアジア太平洋の安全保障に貢献できる“男子の本懐”これに優れるものなし」と。

さて、我が海上自衛隊は、自由主義陣営の海軍力の鎖の要として、米国海軍と共に、四十年に亘る冷戦に耐え抜き、ソビエト連邦は崩壊した。この冷戦の終結は、世界戦争の可能性を著しく縮小させたが、地域紛争の可能性を著しく拡大させた。変貌する情勢及び「防衛計画の大綱」に基づくリストラ（Right Sizing）の中で多角化する自衛隊の役割を直視すると、平時の様々な事態から戦時の武力戦闘に至るまでの広範な領域において、極めて柔軟かつ有効に対応・対処できる特質と能力を有して付加価値の高い海上自衛隊に、国民の期待が高まっていることを実感できる。

「冷戦が終わって、兵力は減ったが、仕事は増えたよ。その上、海の広さは、ちっとも変わってないんだ！」と、米国海軍の老練水兵（ソルティードッグ）が語ったそうである。海上自衛隊も同様であり、冷戦後も海の広さは変わっておらず、直線基線の採用により、我が領水（領海＋内水）は拡大した。そして、自衛艦隊には警備区がなく、東シナ海・日本海・オホーツク海・西太平洋のみならず、9. 11テロ以降、インド洋まで活動海域が広がっている。それでも精強な自衛艦隊は、国民の期待にこれまで明確に答えてきたし、これからもの確に答えていく筈である。

また、海上自衛隊とて例外ではなく、地球規模での大変革に遭遇している。この大変革時代の趨勢として、説明責任（アカウンタビリティ）・情報開示の徹底及び公平・透明なルールの厳守が強調されつつある。前動続行では世間（国民の目による評価）からグローバルスタンダードに背く言い訳としか採られない。そうならぬためにも現実直視と自己変革が要求される。つまり、外の現実世界の変化に的確に対応していくためには、注意深い観察力と鋭い現実感覚とを磨いて、内の意識世界（心）を変革しなければならない。そして、変えるべきものと変えざるべきものとを峻別して、海上自衛隊の伝統・慣習を再確立していこう。

また、現在は、麻薬・オカルト・苛め等文化の頹廃ともいべき世紀末現象を未だに引

きずつている。そういう中で、一つの文化にまで高められたN a v yの伝統を体現する海上自衛隊員の一人一人が、21世紀の健全な社会にとって残された希望の星の一つである。つまり、個々のいずれの隊員の能力も無駄にすることのない文化及び階級や職責にかかわりなく発言できる文化は、価値観を共有し常に学び続け、変化を受容し、変化に対応できる組織にとって重要かつ必要なものである。昨日より今日、今日より明日が良くなるように、思いを巡らし、最善の方策を模索する努力が肝要である。

よって本職は、隊務運営上の要訣として次に示す方針をもって、“ネアカ・ノビノビ・へこたれず、上意下達・下位上達で、当たり前のことを当たり前にする隊風”を醸成して、多角化する役割を全うしていく所存である。

統率方針は「天空海活」である。この意味は、果てしなく大きい度量・おおらかである。「防衛計画の大綱」では、世界軍事情勢の大きな変貌等を勘案し、有効な能力の確保を前提として、防衛力の規模はコンパクトなものを目指す事とされた。諸官は“少数精鋭”の矜持と労苦のなかで、21世紀にもお役に立つ自衛艦隊の基盤を造り上げる気概を持って困難に立ち向かってもらいたい。そして、現有装備の全幅活用・全能発揮を図り、実際的・実戦的な訓練の精到を実直に追求する姿勢を基本に、多様化・複雑化する任務への即応態勢の維持向上に努め、いつ如何なる事にも即応して任務を完遂し得る真の海上作戦部隊として、精強な自衛艦隊を練成維持し、より一層の部隊運用能力の向上を図っていこう。

指導方針は「強い指揮官とタフな隊員」である。

行財政改革が推進され、人・物・金の制約の中、体制改革・業務改革・意識改革を旗印に、効率的訓練、業務改革及び経費節約など、海上自衛隊も厳しい対応を迫られている。かかる厳しい状況下においてこそ優れた心技体に支えられたファイティング・シーマンシップのもと、隊員一人一人が強くとタフでなければならない。そして、いかなる困難に遭遇するとも海上武人として最後まで自己の職務を誠実にやり抜く勇気が要求される。勇気とは恐れを知らながらも為すべきことを為すことである。それが、海上自衛隊の強くなる道でもある。幸い、自衛艦隊は、各地の豊かな自然と人情味あふれる民情の中で、長年に亘り諸先輩が築き上げられた良き伝統を継承しており、またその隊員は、北は稚内から南は沖縄まで各地の特徴を合わせ持つ日本全国から集まった有意の人材であり、それぞれの長所を組み合わせて目的に向かって着実に前進できるものと承知している。これは私の指導方針に通ずるものであり、まことに心強い限りである。

最後に、私は、海上自衛隊を支援していただいている方々、旧海軍の先輩とそのご縁の方々、各国海軍の現役とOB並びに海上自衛隊OBとの人脈は無形の財産と心得て、これらの縁を大切にしてきた。今後とも血の通った交誼を継続して、地域地域との連携も密にし、諸官と心をつなげて、自衛艦隊の新たな一頁を充実した価値のあるものにしたいと願っている。

ご家族を含めた諸官のいやさかと自衛艦隊の精強を祈念しつつ、各指揮官を中心にした諸官の活躍を切望して訓示とする。

平成15年3月27日 自衛艦隊司令官 海将 牧本 信近

(付言；これを読んで、用兵者の心情・信条の方向が見えることを願うものである。)

(つづく)